シューベルトの室内楽

ピアノ三重奏曲 D28

シューベルトは生涯に 4 つのピアノ三重奏曲を作曲している。最初のものである変ロ長調の「ピアノ三重奏曲 D28」は、1812 年、シューベルトが 15 歳のときの作品。次にピアノ三重奏曲が書かれるのは 15 年後の晩年である。1 楽章のみの 10 分ほどの曲で、初々しさに溢れている。

ピアノ三重奏曲 D897《ノットゥルノ》

D28 と同じく 1 楽章のみの 10 分ほどの小品で、書かれたのは死の前年とされる。自筆譜には「アダージョ」とのみ記されていることから独立した作品ではなく、「ピアノ三重奏曲 第 1 番 D898」の緩徐楽章として構想されながら採用されなかったものではないかと推測されている。《ノットゥルノ》というタイトルは、シューベルトの死後、出版された際に付けられたものだが、ロマンティックで甘美な作品内容をよく表わしている。

ピアノ五重奏曲《ます》

本曲は「ピアノ五重奏」と言っても、ピアノに 4 種の弦楽器（ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス）が加わるという一風変わった編成となっている。作曲は 1819 年とされ、全 5 楽章構成。第 1 楽章アレグロ・ヴィヴァーチェは、ピアノの分散和音で幕を開け、豊かな低音に支えられてヴァイオリンやチェロが主題旋律を優美に歌う。第 2 楽章アンダンテでは、叙情的な気分にいくぶんメランコリックな影が差すものの、第 3 楽章プレストで気分を一新して、躍動的なスケルツォとなる。そして第 4 楽章の主題と変奏によるアンダンティーノは、最も有名な楽章で最大の聴きどころ。作品の愛称にもなっている歌曲「ます」D550 のメロディが用いられ、最初はゆったりと、そして次第にテンポを上げながら変奏されていく。第 5 楽章アレグロ・ジュストは、軽やかな民俗舞曲調の主題に明るく歌うメロディが加わって小結尾を迎え、後半は移調してまた清々しい気分の変転を繰り返したのち、曲を閉じる。